

海が教えてくれたこと

MESSAGE



小谷実可子
KOTANI MIKAKO

プロフィール

アーティスティックシンクロコーチ、スポーツコメンテーター。9歳からシンクロナイズドスイミングを始め、1982年、高校1年で単独米国へシンクロ留学。1988年のソウルオリンピックでは、ソロとデュエットで2つの銅メダルを獲得。休養中には長野五輪招致に携わる。1992年の引退後は日本オリンピック委員会、国際オリンピック委員会やアジア・オリンピック評議会でも活躍。2010年は自身の夢でもあるオリンピックの日本開催に向け、東京オリンピック・パラリンピック招致委員会の理事として招致活動を積極的に行った。一方、現役引退後には人生観を変えた野生のイルカとの出会いを通じ、自然や動物に目を向けた活動を行う。1993年より神奈川県の大磯で“アーティスティックシンクロ”の指導を始め、シンクロの普及・指導を行っている。またスポーツ中継のキャスター、リポーター、講演会、執筆活動など幅広く活動。2児の母としても日々奮闘中。第3回ベストマザー賞2010では、スポーツ部門でベストマザーに選出される。

その世界は、今まで私が持っていた“海”のイメージを180度覆すものでした。青く澄んだあたたかな海。包まれていると、どんどん身体から余計なものを剥ぎ取っていく…。海の中で時間を過ごせば過ごすほど、私はシンプルに、小さく小さくなっていきました。幼い頃、映画「ジョーズ」を見て恐怖感を持った海、波に巻かれて砂だらけになって泣いた海、暗くて冷たくて、そしてしょっぱい海…。その後シンクロという競技の選手になり、水の中で費やす時間は格段に増えたものの、海にはもう二度と入るまいと思っていました。

しかし、競技生活を終えた1993年の夏、私は新しい海を知ることとなるのです。イルカを通して…。オリンピックでの私のシンクロの演技をTVで見たという米国人男性から執拗に迫られて、私はバハマ沖のカリブ海に野生のイルカに会いに出掛けました。何でも、海を自由に泳ぐ者たちに私を紹介したいのだということです。見知らぬ米国人のあまりの熱心さと、サメ番が、僕が毎回棒を持って水中でサメ番をするという約束に連れられて向かったこのバハマの海は

真っ青でした。マイアミ港から船で4時間ほど沖に出ると、リトルバハマバンクという比較的浅い、海には白砂が広がるスカイブルーの世界に着きました。

目にするだけで癒される海の色。灼熱の太陽は私をどんどんエネルギーにしていく。ワッと思わず声を上げたくなる。と、そこへ三角のイルカの黒い背ビレがヒョイと現れたのです。「ドルフィン!」。誰かの叫び声で私たちは一斉にフィンを着けて飛び込むと、ツルリンと私のすぐ傍をイルカが通り過ぎていきました。確かに見えたまん丸の目。なんて奥深いのでしょうか。なんて穏やかなのでしょうか。追いかけては逃げられ、また追いかけては逃げられ、仕方なく一人で水中をグルグル廻っていると、今度は彼の方からスイッと寄って来たり。まるで私の方が遊ばれているみたい。

あたたかなスカイブルーの中でイルカと戯れていると全てを忘れていく。オリンピックメダリストであることも、日本人だということも、小谷実可子という名前であることも、そして人間であることも…。目の前にいる彼らと形は違うけれど同等の生命体同士であることに気づく。言葉も交わせない。それでも一緒にただグルグル廻っているだけで、何でもこんなに楽しいのだろうか…。

海の中で私の心はグラグラと音を立てて笑っていました。ただひたすら夢中になって…。そして気まぐれなイルカたちは突然ブイッと居なくなる。さよならも言わずに。次にいつ

会えるかわからない彼らの消えていった方を見つめながら、私は心の中で別れを告げた。そして迫りくる非現実感…。私ってオリンピックメダリストだし、ちょっと有名でちょっと偉いかも思っていた。でもこの大自然の世界にしていると、なんてちっぽけなんだろう。地球にとってなんて無力なんだろう。それでも、こんなただの一人間でしかない私とでも、オリンピックメダルを見せなくてもイルカは遊んでくれた。私、悪い人間じゃないかもしれない。

イルカと出会うために出掛けたこのバハマの海で、自分のちっぽけさを知った私。大自然って、海って、なんて大きいのだろう。地球の約7割を占めるこの海には、まだまだ私の知らない魅力も生き物も、そして恐ろしさもあるに違いない…。ほんの一部の陸地の、ほんの小さな日本国の、ほんの隅の方に生きている私の人生なんて、長い地球の歴史の中では塵みたいなものだ。それでもせっかく生を受けたのだから、地球にとって有意義な一つの人生にしたい。

その後、20年近く経った今でも海辺に立つと思ひ出すのです。私なんてほんの一部。今後いつか私が死んでも海は続き、たくさんの生命を送り出す。いったいいつまで太陽は輝き、海は人を癒すのだろうか。小さな小さな人間社会の文明的発展よりも、自然と共にもっとシンプルに寄り添って生きる術を見つけて生きていきたい。子供たちと共に…。

夏の太陽とキンギョハナダイ(沖縄県西表島北部)
【写真:天谷徹男】